

(別紙1)

尼崎市支え合いを育む人づくり支援事業 教育・研究活動事業実績報告書

教育・研究活動名	尼崎市における「防災福祉力」向上プロジェクト			
申請大学・高校等名	大学及び高校等名	関西大学		
	活動グループ名	近藤誠司研究室	参加学生等人数	30人
指導責任者名及び連絡先	学部・学科等名称	社会安全学部 安全マネジメント学科		
	責任者氏名	近藤誠司	連絡先電話番号	
	E-mail			
協働する市民活動団体及び代表者名	団体名	尼崎市難病団体連絡協議会		
	代表者氏名	小山昇孝(事務局長)	連絡先電話番号	
	E-mail			
教育・研究活動目標	尼崎市は南海トラフ巨大地震等が発生した場合、市域で甚大な被害が発生することが予想されている。また大型台風による高潮災害のリスクも高い地勢にある。そうしたなか、難病患者・障害児者、高齢者などの要配慮者は、防災対策を促進することに苦慮している。そこで本プロジェクトでは、要配慮者との交流を通して、学生が防災と福祉の実態を学び、「防災福祉力」向上策を検討し、市民に向けた情報発信をおこなう。			
活動内容及び実績、評価	(活動内容及び実績) 本年度のプロジェクトは、【A】「要配慮者と大学生の交流事業」と、【B】「大学生による情報発信事業」の2つの柱を設定していた。当研究室では、尼崎市域において2015年度以来、防災支援活動を続けているが、その蓄積も有効に活用しながら、本年度も2つの柱に沿った取り組みを為すことができた。 以下に詳細を述べる。 【A-1】 難病患者団体連絡協議会の要援護者災害シンポジウム 2024年10月27日(日)に、身体障害者福祉会館大ホールにて、難病連主催の要援護者シンポジウムを実施することができた(図1)。 			

図1 尼難連シンポのちらし

阪神・淡路大震災から30年を迎えるタイミングであったことから、パネルディスカッションでは、1995年からの「30年の歩み」を俯瞰して、障害者福祉や高齢者福祉の立場から、それぞれ防災と福祉の領域にリンク取り組み事例を紹介していただき、来場者・登壇者が情報交換を行うことができた(図2)。



図2 参加者みんなで記念撮影

なお、基調講演にあわせて、「フレッシュな防災の知恵」の具体例として、災害時のサランラップの使い方などを大学生のプロジェクトメンバーが紹介した(図3)。



図3 大学生のスピーチ

【A-2】 特別養護老人ホーム・けま喜楽苑の防災訓練視察

2024年11月24日(日)、特別養護老人ホーム・けま喜楽苑の防災訓練(第3回)の様子を、当研究室の大学生・大学院生が視察した。

これは、一昨年度に実施した尼難連シンポジウムが縁となり、昨年度から継続して参加しているものである。福祉の現場で行われる防災訓練はクローズドなものが多いため、このように実際に実働訓練の状況を視察できるのは、学生にとっても大きな学びにつながっている。

【B-1】 あま咲き放送局における防災福祉番組の開発

クラウドファンディングで放送をスタートさせた「あま咲き放送局」において、10分間の防災と福祉に関するトーク番組シリーズを開発し、毎週木曜日の朝10時に放送している。コーナータイトルは、「あま咲き防災ラボ」である。

学生が台本を書き、ゼミ室に音声卓(ミキサー)を構えて学生自身が出演し、それを学生がノートパソコンで編集し、完成した作品を放送局に納品するようにしている(図4)。



図4 あま咲き防災ラボ 収録後の記念写真(大学のゼミ室にて)

これまでに70本を超えるコンテンツを放送してきた。次年度には記念すべきシリーズ第100回を迎える予定で、いま準備を進めている。

なお、阪神・淡路大震災30年の日(2025年1月17日)には、「あま咲き放送局」のスタジオにおじゃまして、1時間ほど生出演した(図5)。



図5 あま咲き放送局「あま咲きモーニング」に出演

【B-2】 尼崎市民祭りにおける防災ブースの出展

2024年10月6日に実施された尼崎市民祭りでは、来場した児童のための「防災フリスビー」コーナー(防災クイズに答えてフリスビーをゲットし、救助や消火の的の中にフリスビーを投げ込む、図6)と、能登半島地震の被災地を支援するための「復興だるま折り紙」コーナー(図7、図8)を実施して、情報発信を行った。



図6 防災フリスビーコーナー



図7 復興だるま折り紙コーナー



図8 尼崎市民祭りの会場にて プロジェクトメンバーの記念写真

(評価)

本年度は、特に上記【A-1】・【B-1】のプロジェクト活動が、これまでの蓄積を活かした充実した内容となっており、学生たちも活発に取り組むことができたものと評価している。交流した現場からは数多くの刺激を受けて、尼崎市の防災と福祉に関して、決して教科書では学ぶことができない知見を得ることができた。

また、尼難連の関係者からも、学生のフレッシュなアイデアを聞く機会があることは、とても刺激になっているとの感想をいただいている。双方が学び合う関係性を構築することができていることは、今後の取り組みの礎となるものと考ええる。

上記【A-1】・【B-1】は、当研究室においても重要な活動であるため、次年度も継続・発展させていきたい。

なお、【A-2】、すなわち、特別養護老人ホームにおける防災訓練を視察できる機会は稀有なことから、大勢の学生に足を運んでももらいたいと考えているが、学内の行事と重なってしまうことが多いため、今後は、現場の視察やヒアリングをゼミ単独で実施できないか模索していきたい。参加メンバーのうち1名は、本年度大学院に進学して、防災と福祉の領域で修士論文を執筆するための研究を進めている。

※ 報告書の内容及び掲載写真は、市報、HP等の市の発行する媒体への掲載される場合がありますので、事前に学生等の同意を得た上で、提出をお願いします